

令和元年5月14日現在

機関番号：14101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K12334

研究課題名(和文) 育児中の在日ブラジル女性の災害時支援—異文化ケアモデルの構築—

研究課題名(英文) Nursing Approach of Disaster Preparedness for Brazilian mothers with children in Japan

研究代表者

畑下 博世 (HATASHITA, HIROYO)

三重大学・医学系研究科・教授

研究者番号：50290482

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、乳幼児を育てる日本人女性と在日ブラジル人(以下、伯人)女性を対象に、異文化看護の視点から災害準備行動の在り方を検討する事である。量的調査と質的調査を行い、日本人と伯人の災害準備に関する認識や準備行動の実態と、その類似点と相違点を明らかにした。日本人に比べ在日伯人は持家率や自治会加入率は低い、交通機関や情報入手、医療について心配する在日伯人は少ない事が明らかとなった。日本に在住する目的は「デカセギ」で、地域との関わりも希薄であった。在日伯人女性は地域に頼れる人もなく、発災時に自分達の命を守れるか疑問である。今後は適切な災害・減災教育を考案し、介入効果を確かめる研究が必要となる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

外国籍、乳幼児は要配慮者であり、外国人母子は二重の災害弱者である。災害発生時に被害を受けるリスクが高い対象で、平穏期から災害準備行動がとれるような支援をする必要がある。日本で生活するブラジル人母子の防災に対する意識や準備の状況を調査した報告は皆無である。本研究において、防災の意識やその準備状況について明らかにすることは効果的な看護介入につなげると考える。

研究成果の概要(英文)：This study aimed to examine the ideal nursing approach to improve the disaster preparedness of Japanese and Brazilian mothers with infants and children under 4 years of age in Japan. The results showed that the proportion of Brazilian who possessed their own house and participated in their neighborhood association was lower than that of Japanese. This study also found that a few Brazilian were concerned about availability of transportation, information, and medical care. Because these Brazilian were living in Japan for economic reasons, their interactions with the Japanese community were limited or rare. If any disaster were to happen, it is doubtful if they would be able to save themselves due to their lack of a support system in the Japanese community. Hence, it is necessary to create a suitable intervention program regarding disaster preparedness for Brazilian and to evaluate its effects.

研究分野：公衆衛生看護学

キーワード：異文化 防災

1. 研究開始当初の背景

東日本大震災後から在日外国人を対象とした実態や災害意識調査が行われたり、多言語での災害予防パンフレットが作成されたり、防災訓練が行われてきている。東日本大震災で生死を分けた要因の一つは情報・コミュニケーションであり、津波の襲来を知らせる人や組織があったかどうかであると言われている。日本語非母国語者にとって、「情報の理解」は深刻な意味を持つ。地震は世界の常識ではなく、国によって様々である。特にブラジル人は地震を経験したことのない人が多い。日本で地震を経験したが、揺れがおさまった後も怖くて家に入れなかった、「カイダンにヒナン」と言われても何か分からなかったという声もあった。また、災害時に女性が直面する特有な問題についても研究が行われ、福知山市では大水害後、ボランティアにより「福知山子育てファミリーのための防災ハンドブック」が作成されている。しかしながら、異文化の視点から在日外国人母子(ブラジル人)の災害予防や災害時に焦点を当てた研究はみあたらない。

在日外国人であること、乳幼児であることは、要配慮者であり、外国人母子は二重の意味で災害要配慮者である。発災時に大きな被害を受ける危険性が高く、準備期における災害の備え、準備行動がとれるような介入を行う必要がある。乳児は発災時に単独の判断や避難行動が困難であり、そのようなわが子を伴う母親の場合、避難行動時の自らの生命に及ぼすリスクは一人の大人が避難する時よりも大きい。

東海地域は、30年以内に南海トラフ地震発生確率は88%と予測され、外国人を含めたすべての住民への防災対策が急がれる。就労者は企業などで防災への知識や行動を学ぶことを期待できるが、育児中は仕事を辞め自宅で過ごしている母子は、近隣との交流が少ない環境で、日本社会へも溶け込めず、ポルトガル語のテレビやインターネットで情報を得ながら日常生活を送り、国際交流協会や自治体が主催する防災訓練等にも行けない状況があり、早急に対応が求められる課題である。

2. 研究の目的

本研究の目的は、乳幼児を育てる在日ブラジル人女性を対象に、異文化看護の視点から、

- (1) 地震及び水害に関するストック情報(既存情報、経験から得た情報で、日本人とどう異なるか)、フロー情報(行動を起こすために必要な情報が届いているか)及びニーズを明らかにし、提供すべき防災知識と有用な支援・対策を明確化する。
- (2) 災害パンフレットの作成、並びに地域住民・関係機関と協働し災害に関するワークショップを行い、協力体制やネットワークづくりの強化を行う。

これらを通じて、乳幼児を育てるブラジル人と日本人との災害時の対応の違いを明らかにする。

3. 研究の方法

- (1) 実態調査(ストック情報及びフロー情報の実態を自記式質問紙調査により把握する。)

対象:

ブラジル人女性: 保健師新生児家庭訪問時に研究案内文と質問票を対象者に手渡ししてもらい、留め置き後、郵送により返信してもらう。または、産婦人科クリニック及び小児科クリニックにて、受診時に研究者(通訳同伴)が研究目的等を説明し、同意が得られれば、質問紙を手渡し、郵送により返信してもらう。さらに、一人のブラジル人女性から次のブラジル人女性を紹介してもらう雪だるま式サンプリングも実施する。

日本人女性: 保健師新生児家庭訪問時に研究案内文と質問票を対象者に手渡ししてもらい、留め置き後、郵送により返信してもらう。もしくは、乳幼児健診対象者に質問紙を手渡し、郵送にて返信してもらう。

調査内容:

母親の属性: 年齢、住居、家族形態、年収、在日年数、日本語能力、将来の在住予定、自治会加入の有無等

同居する者の属性: 子どもの年代・人数、同居者人数

災害の経験や意識: 災害への不安と種類、自然災害の経験、災害発生時の心配事

災害対策行動: 防災訓練の参加経験、子どものお迎え訓練への参加、実施している災害への対策、災害時の家族との連絡方法、地震直後の初動行動、避難場所の認知状況、指定避難所の現地確認、家庭の備蓄、非常持ち出し品等

情報源: 日頃の情報源、SNS利用状況

分析方法:

2群(日本人とブラジル人)の平均値(unpaired t-test)または割合(2 test)を比較した。

- (2) インタビュー

対象者はブラジル人女性のみ: 保健師新生児家庭訪問時に質問紙を手渡す際に、インタビューの内容と概要、インタビューを引き受けても良いかどうかのカードを手渡し、質問紙に同封

してもらおう。または、産婦人科クリニック及び小児科クリニックにて質問票を手渡す際に、インタビューの内容と概要、インタビューを引き受けても良いかどうかのカードを手渡し、質問紙に同封してもらおう。

(3) パンフレット

既存のパンフレットの内容を検討する。

(4) 協力体制とネットワークづくり

ブラジル人が居住する地域のキーパーソンと協議する。

4. 研究成果

(1) 実態調査

大地震が想定される地域を中心に、ブラジル人女性と日本人女性の乳幼児を育てる母親の災害に関する認識や行動の実態を明らかにし、必要な防災・減災対策について異文化の観点から検討した。その結果、日本人に比べて在日ブラジル人は持ち家率が低く、日本に在住する目的は「デカセギ」で、自治会加入率も低く、日常生活の意味付けとともに地域への意識と関わりに違いがあり、このことは子どもの地域生活や災害に備える母子の行動、地域の支援環境にも差を生むものと考えられた。両者の地震や津波に対する不安に有意な違いはみられなかった。

一方、交通機関の麻痺を心配するブラジル人はほとんどなく、情報の入手を心配するブラジル人は皆無であった。また、災害発生時に家族の安否を心配する者が日本人女性では9割と多かったのに対してブラジル人女性では1割強と少なく、日頃の情報源として家族を挙げる者も日本人の6割強に対してブラジル人が2割弱と少なかった。交通機関や情報入手、医療について心配する在日ブラジル人は少ないという現状が明らかとなった。彼らの経験した地震は大規模ではなかった可能性が高く、交通機関の混乱や健康面への心配がなく、インターネットや電話により容易に情報を入手できたため、大地震の影響を想像できていないものとする。まず、大地震の生活への影響の理解と大きな揺れの体感経験が必要であろうと考える。

(2) インタビュー結果

上記についてインタビューを実施し、分析をすすめている。

- ブラジル災害の種類
- 日本の自然災害の知識
- 日本とブラジルの災害の類似点と相違点
- ブラジルでの災害発生時の対応
- 今、地震が発生した時の対応
- 避難訓練について
- 安全対策の実施状況
- 備えの対策状況
- 自治会参加状況
- 避難場所と道順
- 災害が発生する要因

大半の女性は、ブラジルで多い災害は「水害」と答え、インフラ整備ができていないので、雨が降るとすぐに水浸しになると答えた。日本はブラジルと比べ行政準備と支援が行き届いているので心配していないとする者が多くみられた。また、災害避難訓練を受講していない者が大半で、乳幼児を育てる母親の特徴を組み入れた教室を実施することの必要性が示唆された。

(3) パンフレット

春名めぐみ、吉田穂波監修：「あかちゃんとママを守る防災ノート」の内容が乳幼児を育てるブラジル人母親に適切であるかどうかを検討した。

(4) 協力体制とネットワークづくり

ブラジル文化と日本文化の両方を経験し、キーパーソンと考えられる3名の方と話し合いをもった。現在、ブラジル人母親同士がサポートし合うSNSのネットワークが存在するため、その様なツールを利用させてもらうことが良いのではないかと、また、ブラジル領事館のサポートを依頼することも有効ではないかという結果となった。しかしながら、案にとどまっている状況である。

<引用文献>

河北新報 ONLINE NEWS、アーカイブ大震災「避難」言葉の壁厚く、2016、
https://www.kahoku.co.jp/special/spe1168/20160217_02.html (閲覧日：2019年1月28日)

春名めぐみ、吉田穂波、あかちゃんとママを守る防災ノート、2015、
http://www.bousai.go.jp/kaigirep/kentokai/hinanzyokakuho/wg_situ/pdf/dai3kaisankou4.pdf (閲覧日：2017年8月10日)

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 0 件)

〔学会発表〕(計 0 件)

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年:

国内外の別:

取得状況(計 0 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年:

国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名: 西出 りつ子

ローマ字氏名:(NISHIDE, ritsuko)

所属研究機関名: 三重大学

部局名: 大学院医学系研究科看護学専攻広域看護学領域

職名: 教授

研究者番号(8桁): 50283544

研究分担者氏名: 谷村 晋

ローマ字氏名:(TANIMURA, susumu)

所属研究機関名: 三重大学

部局名: 大学院医学系研究科看護学専攻広域看護学領域

職名: 教授

研究者番号(8桁): 60325678

研究分担者氏名: 石本 恭子

ローマ字氏名:(ISHIMOTO, yasuko)

所属研究機関名: 三重大学

部局名: 大学院医学系研究科看護学専攻広域看護学領域

職名: 助教

研究者番号(8桁): 50634945

(2) 研究協力者

河田 志帆

ローマ字氏名:(KAWATA, shiho)

鈴木 ひとみ

ローマ字氏名:(SUZUKI, hitomi)

マルティネス 真喜子
ローマ字氏名：(MARTINEZ, makiko)